

# 「The OECD Learning Compass 2030」 に見る“Agency”とは？

OECD(経済協力開発機構)では2015年に「Future of Education and Skills 2030 project」を立ち上げ、2030年に向けて子どもたちに求められるコンピテンシー(資質・能力)や、それを育成するための学び方やカリキュラム、指導法について検討を重ねてきました。これは、新しい日本の学習指導要領にも大きな影響を与えています。第1期の集大成として、2019年5月には「The OECD Learning Compass 2030(OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030)」が公表されました。そこで重視されている“Agency(エージェンシー)”の概念や、“Learning Compass”とはどのようなものでどう活用するものなのかについて、OECD教育・スキル局長のアンドレアス・シュライヒャー氏にお聞きしました。

## Special Interview

### これからを生きる子どもたちには、 身に付けた資質・能力を使って より良い社会を創造する“主体”となってほしい



アンドレアス・シュライヒャー OECD教育・スキル局 局長

東日本大震災後に求められた  
“Agency”を世界へ

世界的に急速な技術革新が進むなかで、社会の構造が大きく変わり、新たな社会課題も多く生まれています。変化が激しく行く先が不確実な時代に、AI(人工知能)に取って代わられない人間固有の力にはどのようなものがあり、そうした力はどうやって育成できるか、さらに、どういった指導法や評価の仕方が有効であるかといった問題提起が、世界中の国々でなされるようになりました。そこで、

国を越えて問題意識を共有して意見を交わし合い、国際的な視点をもって「教育」や「学び」について考えていくということになり、OECD内に「Future of Education and Skills 2030 project(以下、Education 2030プロジェクト)」が立ち上がりました。

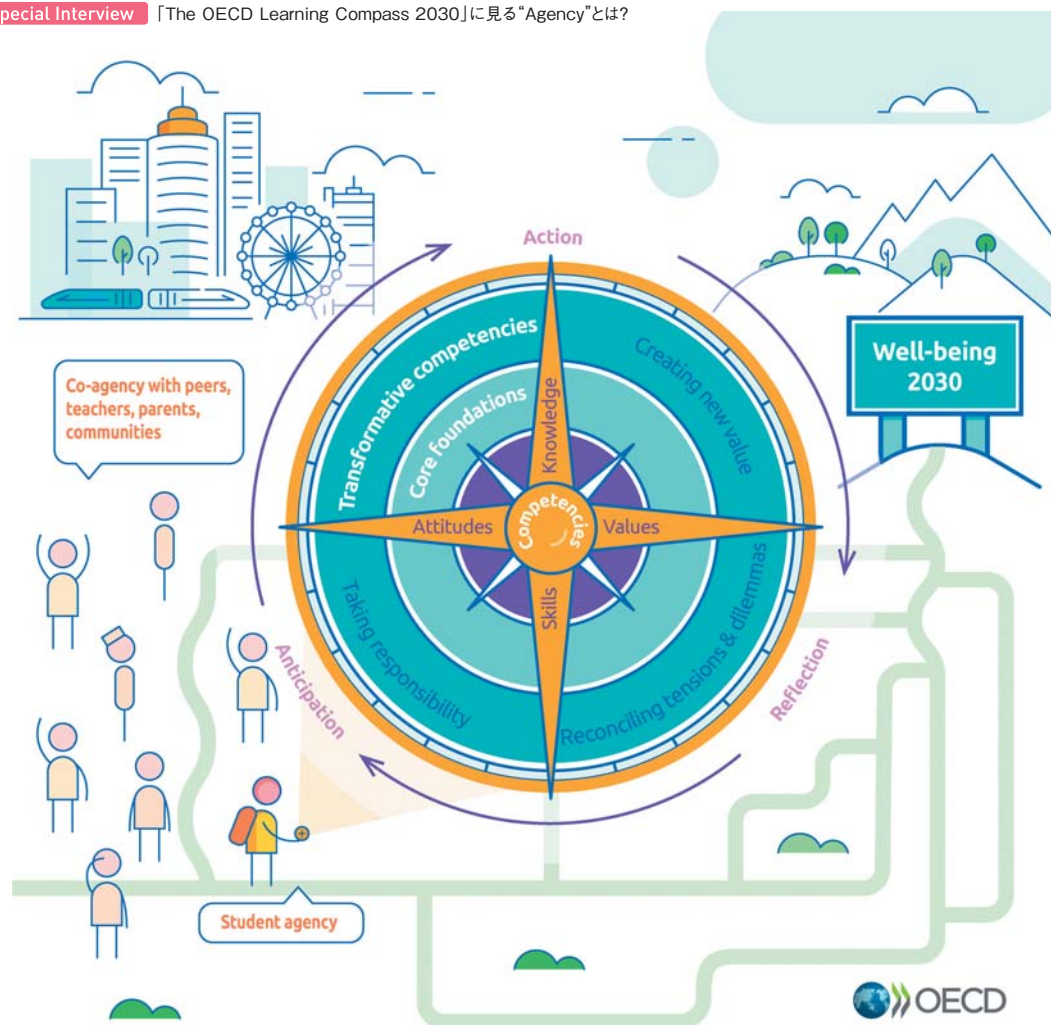
本プロジェクトにおいて最も重要な概念となるのが、Student Agency(生徒エージェンシー)です。Agencyとは、主体的に考え、行動し、責任をもって社会変革を実現していくという意志や姿勢を意味します。このStudent Agencyの原点となったのが、2011年の東日本大震災後にOECDがサポートに入った際の経験です。経済や産業、暮らしの枠組みを

「からつくり直さないといけない」という状況のなかで、子どもたちにも主体性を発揮し、責任をもって新しい生活の創造に貢献していくことが求められました。その様子を目の当たりにした私たちは、子どもたち自身が「受動的な学習者」から「能動的な創り手」へと変わらなければならないことを強く感じたのです。

世界基準の学びの概念地図  
「Learning Compass 2030」

Education 2030プロジェクトの第一期は、カリキュラムの見直し・再構築と2030年に向けた学びのフレームワークのコンセプト作成に重点を置いてきました。そして、その集大成として、この度「The OECD Learning Compass 2030(OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030)」を公表しました。

これは、2030年に向けて、生徒たちがどのようなコンピテンシー(資質・能力)をどのように身に付け、どのようなステークホルダーと協働しながら何を指すのか、を描いた世界基準のコンセプトマップともいえるべきものです。ただし、これは人々に何かを強要するものではなく、人々にインスピレーションを与えたり、生徒のことをより深く知ったりするためのツール



OECDのEducation 2030プロジェクトのホームページでは、The OECD Learning Compass 2030のコンセプトを描いた動画が公開されています。



図1 The OECD Learning Compass 2030 (OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030)

だということに留意していただきたいと思えます。Learning Compassに従うのではなく、自分たちがこれまでやってきたことを当てはめたり、何かを始めるときに参照したりして、その価値や方向性を確認するために活用してほしいのです。

### 求められるのは、より良い未来の創造に向けた変革を起す力

Learning Compassの針に当たるのが、「知識」「スキル」「態度・価値」というキーコンピテンシーです。これらは学びの核となる「Core foundations(学びの基礎・基盤)」で、リテラシー(読解力)や数学的リテラシー、心身の健康、道徳的・倫理的・社会的な人格面の素養、意欲、学びへの姿勢などを含みます。また、「ここでいう知識やスキルは、過去に一般的に定義されていたものとは異なり、「覚える・習得する」という受動的な学びではなく、「新たな知を生み出していく」という能動的な学びが必要とされていることにも留意してほしいと思います。

Core foundationsの外側に描かれているのが、「Transformative competencies(より良い未来の創造に向けた変革を起す力)です。これは、生徒たちが社会に貢献し、より良い未来をつくるために必要な資質・

能力であり、「Creating new value(新たな価値を創造する力)」、「Reconciling tensions & dilemmas(対立やジレンマに対処する力)」、「Taking responsibility(責任ある行動をとる力)」という3つの力を挙げています。「新たな価値を創造する力」というのは、より良い人生や社会を実現するためにイノベーションを起す力であり、AIやコンピューターが不得意なことでもあります。「対立やジレンマに対処する力」というのは、世の中を二項対立的な視点で捉えるのではなく、対立やジレンマのあるなかで合意形成して最適解を見つけていく力であり、不確実な世の中を渡り歩いていくために必要な力です。また、「責任ある行動をとる力」というのは、他者との協働や環境への配慮といった道徳的な視点をもって自分の行動を振り返ったリ価値づけたりできる力のことです。

さらに、「より良い未来の創造に向けた変革を起す力」を伸ばしていくためのサイクルが、「Anticipation(見通し)・Action(行動)・Reflection(振り返り)」のAARサイクルです。これは、闇雲に行動するのではなく、自分の行動がどんな事象につながるのかという見通しをつけ、責任をもって行動を起し、その行動を振り返って次につなげることが重要だということの意味し



## 先生自身がオーナーシップをもち、主体的に良い変化を起こしてほしい

返ることのできる力を意味します。

そして、Student Agencyに伴走するのが、仲間、教師、家族、コミュニティなどのCo-Agencyです。Co-Agencyとは、生徒が目指す目標に向かって進むのを主体的かつ協力的に支え、協働することを意味します。これからの時代は、他の人々とコラボレーションして個人を超えた社会的集合体として大きなビジョンに向かいつつ、主体的にコンピテンシーを発揮していくことが求められるのです。

### さまざまな人々と協働し、より良い社会の創造を志す

図1にあるように、生徒はこのCompassを参照しながら、自身のAgencyを育て、発揮していきます。Student Agencyは、自分の人生や自分を取り巻く世界に良い影響を与える力や意志が自分にはあるのだ、つまり、自分が主体なのだ、という信念に基づいており、目標や進むべき方向を設定する力、変革を起こすために責任ある行動を取り、その行動を振り

ナーシップをもち、主体的に考え、行動し、良い変化を起こしていく人にならしてほしいと思います。

先生がオーナーシップをもって、主体的に…と言われると、負担を感じるかもしれませんが、しかし、TALIS S(OECD国際教員指導環境調査)の報告によると、日本の教員の約9割が、教員になる際の動機として「教職に就けば、子供や若者の成長に影響を与えられるということ」を挙げています。Learning Compassで提唱しているコンセプトは、先生方にとっては初心を思い起こさせるもの、本来やりたかったことをサポートするものなのではないかと思えます。これを追い風と捉えて、前向きに進んでほしいと願っています。

### 教える人から創る人へ 先生に求められる役割も変わる

これからの時代は、先生に求められる役割も変化します。カリキュラムに書かれたことを教える人から、カリキュラムのオーナー、実践者へと変わらなければなりません。先生自身がオー

ポレーションにもつながるのではないかと期待します。

### 教育や学びをグローバルにディスカッションしたい

The OECD Learning Compass 2030は今後、世界各国の教育にインスピレーションをもたらすことになるでしょう。例えば、Learning Compassを我々OECDと共に作ってきた仲間であるポルトガルやカナダでは、既にこのコンセプトを教育に関する法律やカリキュラム、ガイドラインなどに活かし、実際にアクションにもつながっています。これまで、教育や学びのカリキュラムは各国が独自に作ってきましたが、今後はLearning Compassが提示する概念に基づきグローバルにディスカッションを重ね、またLearning Compassの各要素の概念についてもさらに深めていきたいと考えています。

今年度からは、Education 2030プロジェクトの第2期がスタートしました。第2期は2030年に向けた「指導法」に重点を置いています。指導法を議論するうえで、現場の先生方の実践知やモチベーション、そして率直な意見が不可欠です。私たちも先生方や生徒たちと共創していきたいので、日本の皆さんの声をぜひ届けてほしいと願っています。



## Workshop Report

# 多くの普通の学校で 未来を目指した学校づくりを 進めていくために

～「OECDラーニング・コンパス2030」の概念を日本の学校教育へ活かす～

日本において「OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」の浸透・活用を推進するのが、「OECD日本イノベーション教育ネットワーク(ISN)」です。8月に福島大学にて開催された「ISN2.0第4回研究会」での議論、およびその概念を体現しているISN参加校の事例から、日本における未来を目指した学校づくりへの活かし方について探ります。

### OECD日本イノベーション教育ネットワークとは？

OECD日本イノベーション教育ネットワーク (Japan Innovative Schools Network supported by OECD) は、以下、ISN) は、OECDの協力の下に生まれた産学コンソーシアム。OECDによる東日本大震災後の復興支援プロジェクトの一つ「OECD東北スクール」の流れを受け継ぐかたちで、2015年に設立された。福島大学と東京大学が中心となり、OECD、大学、全国の高校・高専や中等教育学校、教育委員会、文部科学省、企業、海外の教育機関や研究者などが広くネットワークを構築し、教育や学びの研究・実践を共有する場として機能している。また、OECDでの議論にも積極的に関わり、日本の教育現場の事例の発信を含めて加盟各国と情報を共有している。

研究・実践の中心となるのは、高校・高専や中等教育学校。海外校と協働しながらPBL (Project Based Learning) を軸としたアクティブラーニングを構築・実践し、「ラーニング・コンパス」が示すコンピテンシーやエージェンシーをいかに育むかに取り組んでいる。第2期(2020)である現在は、海外のパートナー校を含めて約50校が研究校・実践校として参加している。

### 参加者自身が新たな概念の 創り手だという意識をもつ

2日間にわたって行われた研究会では、「Agency(以下、「エージェンシー」)」、「Transformative competencies(以下、「より良い未来の創造に向けた変革を起こす力」)といったEducation 2030プロジェクトで議論・提示された概念について理解を深めるワークショップ

に時間が割かれ、これらを概念図化した「OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」(以下、ラーニング・コンパス)についても紹介された。ISNでは国内外の研究会やフォーラムに生徒が主体的に参加しており、今回の研究会でも、生徒が大人と対等な立場でディスカッションに加わり、プレゼンテーションなども行った。

研究会を通してOECD教育・スキ

ル局シニア政策アナリストの田熊美保氏から発信されたのが、「ここにいる皆さん自身が、新たな概念、価値の作り手であるという意識をもつてほしい」というメッセージだ。例えば、「エージェンシー」というのはひとりで言い表すことが難しい概念であり、国や文化によって受け止め方も多様だ。「エージェンシーとは何か？」という問いを立て、解釈や実際の学びに落とし込んだ際の在り方などについて一人ひとりが考え、意見を出し合い、共有することが重要だということが強調された。

### 高校生、大学生が考える 生徒エージェンシーとは？

ラーニング・コンパスについては、福井大学の木村優准教授をモデレーターに、OECDの田熊氏、ISNのOGで筑波大学生の中畑希さん、福井県立若狭高校生の竹内陽渚さんがディスカッションを行いながら紹介された。田熊氏から中畑さん、竹内さんへは予め「あなたにとって、Student Agency(以下、「生徒エージェンシー」)とは何を意味するか？」という問いが出されており、二人はそれぞれ次のように答えた。「生徒が、自分がやりたいことに堂々と挑戦していいんだという根拠や後押しになるような概念ではないだろうか。私自身、さまざまな活動に参加して

きたが、周囲の人のなかには『勉強もせずに何をやっているんだ』と感じていたらもいたと思う。生徒エージェンシーという概念があることで、好きなことにチャレンジすることを肯定的に見てもらえるような気がする(中畑さん)

「自分の意見をもつだけでなく、それを他の人たちに伝え、共有すること。私自身、自分の考えが社会や未来にどうつながるのかは自分だけではなかなかわからなかったが、周囲の人にいいねと承認してもらおうことで、つまり客観的な視点が加わることで、つながりを実感できエージェンシーが高まるように感じた」(竹内さん)

### コンパスと実践とを照らし合わせて意見を交わす

また、1日目に行われたグループ学習では、「エージェンシー」「AARサイクル」「より良い未来の創造に向けた変革を起こす力」「コンピテンシー&2030年に向けたウェルビーイング」のテーマが割り振られ、ラーニング・コンパスと自分たちの実践とを照らし合わせながらディスカッションが行われた。さらに、各グループで出た議論と知見を全体共有し、エージェンシー(生徒エージェンシー、Teacher Agency:教師エージェンシー、Co-Agency:共同エージェンシー)については次のような意見

が提示された。

◆生徒を誘導するタイプだった先生が、私たち生徒が自分たちのやりたいことや意思を伝えるようになったら、それを尊重してくれるようになった。生徒と先生は、お互いに変われる。

◆高すぎる目標を与えることで生徒のエージェンシーをつぶしてしまうことがあるように思う。生徒エージェンシーをいかに伸ばすかは、教師側の力量が問われる。

◆教師エージェンシーは、doing(何をすべきか)ではなくbeing(どうあるべきか)が重要だと感じている。

### 生徒が主体的に学び習得したコンピテンシーは消失しない

さらに、2日目には「エージェンシー」「私たちが望む未来」「より良い未来の創造に向けた変革を起こす力」「カリキュラム改革」の4つのテーマに分かれ、研究・実践から知見を得るワークが行われた。エージェンシーについては、東京学芸大学次世代教育研究推進機構の柄本健太郎氏が「エージェンシーとは何か?」を掘り下げる現在進行中の研究の一端を紹介し、福井大学教育学部附属義務教育学校の柳本一休先生が、実践紹介として自身の数学の授業の様子を紹介した。そのなかで柳本先生は「教科としての知識・概念・



「高校生フェスティバル」の様子。今年は10月27日に開催予定。



写真左から、山谷さん、本多さん、三浦先生、武藤さん。

ISN  
実践事例

1

## 福島市を創る高校生ネットワーク (FCN)

### 高校生の力で福島市を盛り上げ、 周囲の大人に影響を与える

2015年、ISNの中核メンバーである福島大学・三浦浩喜教授の呼びかけに集まった、福島市内の中学生約20名によりスタートした福島市チーム。「福島市には自慢できる魅力がない」という生徒たち自身の課題感から出発し、地元の人々の協力を得ながら「中学生の目線から地域の魅力を再発見し観光プランをつくる」という政策提言をまとめ、翌年の夏には観光プランを実行した。

メンバー全員が高校生になった2018年には、活動の輪を広げるために「福島市を創る高校生ネットワーク(FCN:F-city Creators Network)」を結成した。大学進学者の5人に4人が県外に出てしまうという課題から、福島市を自分たち高校生が元気づけ、愛着をもてるようにしようと、「福島市高校生フェスティバル」を企画。「大人じゃできないことがある!」を

テーマに、高校生が自分たちの手で創り上げた。FCNが掲げる目標の一つが、「高校生がやる気を出すことで大人に影響を与える」。これはまさに、生徒エージェンシーを体現したものだといえるだろう。また、こうした活動と並行して、台湾の台中市私立立人高級中學と交流を深め、現在では人口減少問題などの共通課題に協働して取り組もうとしている。

#### 生徒の声

●高校生フェスティバルでは、各メンバーが得意なことを活かせるよう、活躍の場づくりを意識しました。途中で何度も壁にぶつかりましたが、最終的には多くの高校生を巻き込むことができ、さらに他の市町村にも活動の輪が広がっていて、とてもうれしいです。(福島県立福島南高校3年 山谷実加さん)

●福島市の魅力を発信するために農家の人に話を聞きに行ったり、台湾の学校との交流では2泊3日の訪日プランを自分たちで考えて実行したり、台湾

に行って高校生フェスティバルのことを発表したりして、たくさんの人とつながりながら活動しています。(福島県立福島東高校3年 本多美久さん)

●福島市をより良い街にしたいという思いがあり、中学生の頃から活動に参加しています。学校の探究活動でも「福島市は将来どうなっていくか」というテーマを設定し、FCNの活動と連動させながら取り組んでいます。(福島県立福島東高校2年 武藤昌大さん)



技能は覚えてもすぐに忘れてしまうが、生徒が主体的に学び習得したキーコンピテンシーは、一度身につけると消えない」と述べ、生徒自身が抱く間いや違和感(正しいものとのズレ)に発する授業を教師と生徒が協働してつくり上げていくことが重要であること強調した。生徒が授業の感想を述べた動画も披露され、生徒のエンジェンシーを培うことを主眼にデザインされたカリキュラムに、ワークの参加者たちは大きな感銘を受けたようだ。

### コンパスは、実践の価値や方向性を確認するためのもの

教師、研究者、大学生、高校生、企業人と多様なステークホルダーが混じり合っで行われた今回の研究会。

「エンジェンシーという概念と初めて出会った」という人も少なくないなかで、率直な感想が、鋭い指摘が、異なる視点からのコメントが行き交い、議論が深められていった。

ラーニング・コンパスを手にした者に求められるのは、エンジェンシーをはじめとした概念をどう捉え、自分たちの実践にどう活かしていくかということだ。現在の教育においては、教えねばならないことややらねばならないことが山積しており、先生も生徒もカリキュラム・オーバードに陥りがちだ。ラーニング・コンパスのコンセプトに基づいて本当に育成したい資質・能力を明確化することで、教育内容に優先順位をつけたり、何に焦点を当てるべきかを教員同士で共有したりすることができるとはならないだろうか。

田熊氏は、研究会の最後をこう締めくくった。「この大きな変革の波のなか、取り組み方や進度によって学校間の格差が大きくなってしまいう可能性がある。このラーニング・コンパスは、こんな未来をみんなで目指しませんか、という学びや教育の世界観であり、上位概念としての考え方のフレームである。ぜひ日本の教育現場でも活用し、多くの普通の学校で、未来を目指した改革を進めていってほしいと願っている」。

## ISN 実践事例

### 2

## 福井県立若狭高校

### 教師がエンジェンシーをもち、生徒のエンジェンシーを培う

福井県立若狭高校では、「異質のものに対する理解と寛容の精神を養い、教養豊かな社会人の育成を目指す」という教育目標を実現するために、探究(学校設定教科)、教科授業、特別活動全体を通したカリキュラム開発に取り組んできた。特に探究については、多様な地域資源や身近な事柄から課題を設定する能力、さまざまな背景をもつ他者と協働しながら課題を粘り強く解決する能力の育成を目指し、段階的かつ系統的に課題探究に取り組むカリキュラムを構築・実践している。生徒のエンジェンシーを培うために、教師も共同エンジェンシーをもって関わるよう指導体制の構築に努めており、今年9月に開催されたG20サミット教育関連イベントにカリキュラム開発を担当する渡邊久暢先生と国際探究科2年の荒木美咲さんが登壇して探究の取り組みについて発表



G20のイベントで、地元・高浜町の再興策について発表する荒木美咲さん。



教師自身がエンジェンシーをもって生徒に関わり、生徒の探究活動に伴走する。



地域の人と関わり合いながら学びを深める姿は、まさに「共同エンジェンシー」。

を行うなど、北陸エリアを代表するPBL実践校となっている。

渡邊先生は、ISNの研究・実践に参加することの意義についてこう語る。「グローバルな視点で考察されたフレームにおいて本校のカリキュラム開発がどう評価を受けるのか、研究者やOECD担当者などさまざまな方からフィードバックや知見を得られることに大きな価値があると感じています。また、それがより良いカリキュラム開発の促進にもつながっています。一方で、国やOECDに向けて本校の実践成果や課題を積極的に発信することも重要だと考えています。現場の実践を研究理論やフレームの改善に活かしてもらえるよう、研究と実践とをフラットに往還させることを通して、お互いがWin-Winの関係を結ぶことがISNの魅力です」。



写真左から、渡邊先生、竹内さん、同校の水谷友梨先生、中森一郎校長。

### 生徒の声

● 今年の5月にはカナダで開催されたEducation 2030のフォーラムに参加し、海外の高校生や教育関係者と交流する機会がありました。今回の福島での研究会では、カナダでの体験を語る機会やグループワークをファシリテートする機会を頂き、まさに“エンジェンシー”を発揮する良い経験になりました。こうしたISNの活動を通して、高校入学前からは想像もできないほど世界が広がり、自信がついたと感じています。(国際探究科2年 竹内陽渚さん)